

平成28年度 プロジェクト研究所業績報告書（中間報告）

プロジェクト名	アート・コミュニケーションプロジェクト
研究所名	アート・コミュニケーション 研究所（所長 椎原 伸博 教授）
設置開始	2014. 4. 1
設置終了	2018. 3. 31

■研究の進捗状況（研究員の活動実績含む）

研究初年度は、シンポジウムとワークショップを各2回行った。研究2年度は、認定NPO法人芸術資源開発機構の三ツ木紀英氏を講師に迎え「対話型鑑賞コミュニケーター（ファシリテーター）養成講座」を開いた。研究最終年度の本年度は、2年度の対話型鑑賞を発展させ、渋谷区的美術館での運用を目指したが、担当者との調整が上手くいかなかったため、実地調査に基づく研究とアウトサイダーアートに関するシンポジウムの企画運営の二本立てで研究を行った。

まず実地調査では、静岡県文化政策（椎原、下山）、岡山芸術交流と奈良町芸術祭 奈良県はならあとの調査（椎原、下山、神野、宮原）、新視野芸術節の調査（椎原）、瀬戸内国際芸術祭2016および香川県美術施設などの調査（下山）、あいちトリエンナーレの調査（工藤）、金沢の創造都市政策の調査（椎原）、水戸美術館の調査（椎原）、宇都宮の美術館調査（椎原、宮原）を行ったが、地域を舞台とするアートプロジェクト、あるいは地域アートと呼ばれている運動の現状を確認した。工藤研究員は、そういった場では「社会に参与する芸術」という新しい価値が生じていることを検証し、自らが主宰しているNPOで大規模な展覧会「ソーシャリーエンゲイジドアート展 社会を動かすアートの新潮流」を開いた。この傾向を神野研究員は、社会の芸術フォーラムの運営を通じて、再検討を加えて『社会の芸術／芸術という社会』（フィルムアート社）にまとめ出版した。また、椎原は日本アートマネジメント学会全国大会にて、地域アートの問題について「地域アート論」以降の「アートプロジェクト」論について」という発表を行った。

今年度から研究に参加した、宮原研究員はかつて那覇市にあったアートスペース「前島アートセンター」の運営に関わっており、その時の経験をいかして、トークセッション「政治とアート～アートはだれのもの？」を企画した。このトークセッションは、アウトサイダーアートの紹介者である櫛野展正氏の基調講演を行い、その後現代アートの現場で活躍している花房太一、奥平聡、太田エマの三氏を加えて、ディスカッションを行った。そして、そのあとで、人間社会学部の松下慶太准教授、府中市美術館学芸員の武居利史氏を加えた総括セッションを行った。

現在、アウトサイダーアートへの関心の高さもあり、学生のみならず、多くの聴講者を集めることが出来た。その記録は、発言内容を書き起こして纏め、事業報告書で発表した。この問題に関しては、次年度以降も重要な問題であることを研究員間で確認した。

■現在までの達成度

研究2年度実施した「対話型鑑賞コミュニケーター（ファシリテーター）養成講座」は受講学生の満足度も高く、研究の達成度は高かったが、その成果を近隣地域へ還元する試みは進展していない。一方、アウトサイダーアートや芸術の社会包摂に関する問題は、トークセッションを通じて、研究員全員が共有し、各研究員の研究の達成度は高まっている。また、地域アートに関する調査の達成度は高いが、毎年のように新たな芸術界が全国各地で展開しているので（本

年度だけでも、市原、能登、札幌、北ア ルブス等々)、引き続き調査を行う。

■次年度以降の研究（見込み）

研究 2 年度に行った「対話型鑑賞コミュニケーター（ファシリテーター）養成講座」は学生への教育効果が高かったが、この事業を再度行うことは困難である。しかし、このとき参加した学生が 5 名も大学院 に進学しており、この問題意識の高い大学院進学者をアシスタントにつけて、前回の講座を発展させた講座やワークショップを開く予定である。具体的には、対話型鑑賞教育の内容と実際に対話型鑑賞教育を実施している美術館関係者を講師に招き、その有効性を検証する。検証作業については、講座を担当していただいた NPO 法人芸術資源開発機構の三ツ木紀英氏、三ツ木氏の指導の下で対話型鑑賞教育プログラムを実施している美術関係者にお願いする。また、対話型鑑賞プログラムには限界があることに関しては、東京国立近代美術館学芸員一條彰子氏を招き、世界的な動向に関するレクチャーを企画する。

また、本年から「アートマネジメント論」の非常勤講師として、オリンピックの文化プログラムの実務者である杉浦幹男氏を採用すると共に、本研究所員に招聘し、オリパラ事業に関連する教育プログラムを構築する。現在杉浦氏の仕事は地域社会の文化振興が中心であるが、その知見を学生へ還元するプログラムを開発する。また、椎原と神野研究員は地方自治体（千葉市、千葉県、神奈川県、山梨県）の文化政策関連委員を務めており、オリンピック関連の動向を研究会の活動に反映させる講座を開くことにする。さらに、オリンピック絡みでは椎原晶子研究員が幹事をつとめている「東京文化資源会議」の活動について、学生向け講座を企画し、学生自身が何かしらの文化政策的な提言を発信出来るようになることを目標とする。そして、それがアートを媒介したコミュニケーション能力でもあることを、自覚させ学生のキャリア形成に役立てる。

■研究活動における成果

(1) 研究成果(雑誌、学会発表、図書等)

研究成果については、「実践女子学園アート・コミュニケーション研究所 平成 28 年度事業報告書」を作成した。報告書には、実地調査の報告と、「トークセッション「政治とアート～アートはだれのもの？」」の報告を行った。代表椎原は、日本アートマネジメント学会にて「地域アート論」以降の「アートプロジェクト」論について」という発表を行った。

それ以外の研究成果としては、神野研究員は研究成果を「社会の芸術フォーラム共同代表」「千葉アートネットワーク・プロジェクト代表」等の活動に活かし、『社会の芸術／芸術という社会』（フィルムアート社）にまとめ出版した。椎原晶子研究員は、「東京文化資源会議」などの活動に活かし。工藤研究員は「社会に関与する芸術」に関する大規模な展覧会を開催し、その啓蒙活動につとめた。下山肇、織田涼子研究員は、自身の実技制作等に研究成果を還元している。

(2) 学生・生徒の教育及び支援に関する還元

1 月にトークセッション「政治とアート～アートはだれのもの？」を行い、学生にアウトサイダーアートや、社会包摂としての芸術に関する問題を提起した。それぞれの研究員が行った調査の結果は、各々の授業に反映させた。